

## 生存学研究センターによるアーカイヴィング

立岩 真也

(立命館大学)

立岩と申します。これから20分お話しします。

本日みなさまお集りいただき、ありがとうございます。実質的にはこの企画は美馬さんが考えて、いろんな人に声をかけて、12月の初めの忙しい時期なんで、みなさん来ていただくの難しいかなと思ったんですけども、なんと、声をかけさせていただいたところ、ほぼ全部オッケーっていう返事をいただいて、それですごい盛り沢山になったんですね。ですから今日はとっても長い、一つ一つは短いですが、全部合わせるとずいぶん長い時間の研究会になりますけれども、最後まで、時間の許す方は最後まで、お付き合いください。

今、美馬さんが紹介してくれたように、僕らは立命館で生存学研究センターっていうのをやっています。で、どういうものかっていうのは、長くなるので説明しませんが、今日報告していただく方には、『生存学の企て』っていう、その中には、かなりアーカイブに関係する資料をどういふふうを集め、集めたものをどういふふうの研究の成果にしていくのかっていう、その事例の一部と、それからどういふスタンスでものをやっているのかっていうことが書いてある本が2016年に出版して、そうしたのも見ていただきたいです。その本をここで話しなさる方には差し上げようと思います。そうでない方は差し上げませんが、たくさんありますので、「いつも本を売ってる」と言われる私ですが、本を今日も売りますのでよろしく願います。っていうセンターです。

それで、その中で、始まったのは2007年ということになるんですけども、最初から資料を集める、言葉を集めるっていうことはとても大切なことだっていうふうに、たぶんセンターがどういふことの前から、思っただけだと思うんですよ。

で、今日お配りするのは、今スクリーンに映ってるもので、私の名前を検索してもらって(→ <http://www.arsvi.com/ts/0.htm>)、2018年の12月1日っていうところに行ってもらって(→ <http://www.arsvi.com/ts/20181201.htm>)、これが出てきます。で、今PCでつながってる人であるとか、お家に帰って見ていただける人

はこれを見ていただくと、色んなところにリンクされる、先ほど紹介した『生存学の企て』っていう本の紹介にも入っていくっていう、そういうものなんですけれども。

ここの中に太字で、「人文社会系の「センター」がある物理的な空間を有することの大きな、唯一と言ってよいかしれない機能はそこにあると思う」と書いてあります。人文社会系の研究ってのは、最終的には一人一人がやるものであって、寄ってたかって集まる必要っていうのがそんなにあるかっていうとない、ことも結構あるような気がするんです。ただ、それでも「集める」っていうことだけについて言えば、例えばその、書籍、機関紙の類であれば物理的なスペースも要ります。それを整備する人も要ります。場所が要り、人が要り、それに関わるお金も要る。そういうものっていうのは、いくつかの主題、多くの主題について、例えば全国に一つずつぐらいの感じでは絶対要るよな、っていうことをずっと思い続けていて、その一部をここで実現しようとしているっていう、そういうことなんです。

で、この間(かん)、いろんな、文部科学省であるとか、立命館大学様であるとかですね、そういうところにお金を頂戴しに、いろんなところに何うわけだけでも、まあ今日(こんにち)、いわゆる前向きか、明日がどうかという、展望がどうかという、そういう類(たぐい)の研究の一部にしかお金を出不いっていう流れになっていて、まあわからんではないけれども、よろしくない。そう思います。やっぱり集めて、蓄えて、それを発信するっていう、地道なことが必要であると。そしてそれはですね、3年ものとか5年ものとかっていう科学研究費、取れる時は取れるけれども、切れたらなくなるっていう、そういう仕組みのもとでなされるべきことでは本来、ないわけです。そういう意味で、少なくとも立命館っていうサイズの大学であれば、そこそこお金もあるんでしょう、たぶんね。というふうなところであれば、一つ一つ、例えば一つ一つのそういうものを常置して、人もつけ、お金もつけていうことは、絶対必要だろうと思ってきて、しかし、なかなか言うことを聞いていただけないんですけども、お上にですね。それ

でも、言い続けて、これからもっとやっ払いこうと思ひます。

で、僕らがやっ払いのは、さっき美馬さん言っ払いけれども、障害とか病とか、そういうことに関係するものです。けれども、それのつ一つつのことを総合的に集めよう、なんてことを考えたらですな、これはちよつとやっ払いとじやできないわけです。それは、億とかつていう金があつたり、何千万つてお金があつたら、そこそこ総合的なつてことになるかもしれないけれども、今それは無理だ。しかし無理だからやんないつていうのは最悪手なわけ、やれるところからやっ払いつていうことです。

つまり、今ほくらのセンターに、それから大学院の研究科に集っている人たちが、一人一人のテーマつていうものを持っ払い。そうすると、その一人一人のテーマに關係する資料を集めていく。あるいは、あとで紹介できればと思ひますけれども、ここ数年、非常に寄贈の申し出つていうのが増えているですな。このことにはある種の必然性があるとほくは思っ払いますけれども。そうやっ払い、たまたまつていう部分も含めて、集まってくるものを集め、僕らの一人一人が興味を持っ払いものを集め、そうしたものを集めて、何とかお金もそうないけれども整理していくつていうこと、これを続けなきゃいけない。始めて、終わらせることなく続けるつていうことがつても大切なことだつていうふうに思っ払いています。この資料はですな、法政大学の大原社研（大原社会問題研究所）にある「環境アーカイブズ」という、環境問題・公害とかに關わる資料を集めているところのニュースレターに書かせていただいた文章で、そこで引用しているのは、先ほど紹介した『生存学の企て』つていう本に書いた「アーカイヴィング」つていうコラムの一部なんですけれども、そんなことを書っ払いています。

さて、じゃあ具体的にどういふふうにな何を集めるかつていうことなんだけれども、僕らの場合は、基本的には言葉ですな。言葉といつても、文字・活字、文字になつてもの。それは公刊されてる書籍であつたり、一般的な本屋さんで売っているようなものではない機関紙であるとか報告書の類、それから、これはまだまだこれからつていうことですけれども、声ですな。人間、文字にして残せる人つていふか残したい人つていふのはなにか特殊な人であつて、多くの人はそのような面倒臭いことはしないまま、生きて死んでいくわけです。そうしたもの、言葉つていうのも、色んなところにあるけれども、消えていく、つていふようなものであつて、それを集めていくつていうことになります。

で、ちよつとホームページ見てもらひますけれども、このホームページは、僕らがやっ払い…、2種類サイトがあるんですが、そのうちの1個で、arsvi.com つていうものです（<http://www.arsvi.com/>）。で、世の中にある關係する本を全部つていっ払いいくらあつても足りないわけだから、さっきも言っ払いように、例えば私が興味がある、こちらの院生が興味のある、そうしたものを手がかりにして本を集める。もちろん寄贈していただくものとかそういっ払いのものもある。そうしたものを集める。それからここにあるのは市販されてない報告書つてことになりますけれども、これは単品のですな、つ一つが単体の報告書とかそういっ払いのものですけれども、それ以外に、あとでご案内したいと思ひますけれども、機関紙の類ですな。そうしたものを買ひ受けたり、場合によつたら買つたり、送っ払いいただひたり、そんなことをして集めるつていうことを、何かすごい当たり前のことですけれど、それをやっ払いしているつていうことをしています。

時間がどのくらいありますか？ まだ半分ありますな。それで、つ一つはそういう本、書籍ですな、それから報告書であつたり機関紙であつたり、そうしたものを集める。で、もう既にそれをどういふふうにな知らせていくかつていふ話にな引かかっているわけですけれども、これはつ一つつの文献をアルバイトの方にやっ払いいただひて、ファイルにする。で、ホームページに上げる。そういふことによつて、もちろん直にな借りられる、直にな見れるつていふことが大切なんだけれども、そういふふうにな、来れない人、それから目で見れるつていふことをしない人、できない人にな使えるような形でサイトに上げていくつていふ。もう始まっているけども決して終わらないだろう、そういう仕事を一方ではしています。

で、これがですな、今、「生存学」つていふ検索語で検索すると、1番か2番か3番かにこのサイトが出てきます。もうつ一つが出てくるのは生存学研究センターつていふ組織を案内するサイト（<https://www.ritsumeai-arsvi.org/>）ですけれども、この両方が出てきます。もうつ一つのarsvi.com つていふサイト自体が、アーカイブ、蔵そのものだと考えてくださつてよくて、それが、物理的な空間としての、この建物の4階の書庫というものですな、それと連關して、バーチャルなものとしての、このサイトがある。それが相互にな結び合っているつていふ、そういうイメージで考えていただひればいふと思ひんです。

で、これはページの数が5万とか、もつとかな？ あるのかな？ そういうつ一つつのページの数が多ひいふこともあつて、そこに対するアクセスつていふのは増

え続けています。で、これは実際よくわからなくて、増える理由はあるまいように僕は思ってるんですけども、なぜかこの1、2年は増えている。で、今1年間で2500万ヒットぐらいのアクセスがあります。1日平均が6万とか7万とか8万とかっていうヒットで、それを月にかけて12ヶ月かけると、一時は1千万ヒットぐらいで、それでも「ずいぶん来ていただいているんだな。」と思いましたが、この2年ぐらいの間に増えて、今2千万っていう数を超えてるっていう、そういう次第です。それはこのページの統計、説明…、何かよくわかりませんが、そういうところが表紙にあって、そこから月々どういうサイト…、ページが読まれているのかっていうことも含めて、わかっただけっていう、そういう仕掛けになっています。

で、さっきの方に戻りますと、この「製作責任者」っていうところに私の名前がありますが、そこからいくと、私が関係した本たちですけれども、12月1日っていうのがこうやって紙で配り、そして、ここに見える、そういうページになっているっていう、そういう具合のもので。で、集めてるのは、そういうものですね。

で、寄贈ということについて少しお話を出しましょうか。今僕はずっと落ちこちていた、…何で落ちてたんだろう、科学研究費によく去年当たって、それで、やってるのは「病者障害者運動史研究」っていう、そういう企画です。3年もので今1年半が終わったところなんですけれども、そうした企画をやっています。その成果もあって。で、それは先ほど少し触れかけた、文字ではない、言葉を記録していく。でもまあ最終的には文字になるんだけれども、そうしたことでメンバーたちがいろんな人に会ってインタビューを繰り返している。で、それは録音されたデータとしてとりあえず収録し、文字化されたものも収録し、ただもちろん公開の問題はそれとは別にありますから、一つ一つ承諾の取れたもの、あるいは加筆訂正をいただいたもので、公開できるものは公開していく、そういう形にしていきたいと思っていますし、実際しています。

結局その、例えば僕は「たくさん本を書きすぎる」とか、「無駄に厚い本を書いている」とか、いろんなことをずっと言われて続けて、今も言われてるんですけども、まあその通りですよ。その通りですけども、しかしそれでも本とか論文とかに書けることなんていうのはわずかなものなわけだ。そうした時に、あるいは僕が資料の中から取り出すことっていうのは、言ってみれば私のバイアスがかかっている。好きなところを選び、嫌いなところ

を捨てて、書いている。それは仕方のないことで、必要なことでもあるわけです。だけれども、資料っていうものは別様に読めたりもする。別様に利用したりもできるわけですね。そうした形で、私たちは元のデータっていうものを、もちろんルールに則った形です、できるだけ公開する。私はその中からこういう物語を、ストーリーを見出す。だけれども別の人は違うかもしれない。そしてそのソースっていうものをたくさん出していく。それを整理していく。

で、それは一人一人の研究者の仕事だけれども、その整理の仕方であったり、その中からどういう筋を見つけるのかっていうことは、今度は私が、大学院なら大学院の教員としての仕事だということ、大学院生と一緒にこのデータを突き合わせて、ここからどういうストーリーが見えてくるのかっていうことをディスカッション、あるいは授業、演習で話（はなし）しながらやっていく。そのためにも、基礎的なトレーニングも兼ねてですね、一人一人の研究者、院生には自分のテーマに関係するデータ、それは書籍、文献に関するデータであったり年表であったり、事件に関するものであったり、そうしたものを集める、集めることに対して助言する。そしてその作業の経過・結果を、そのままの形で、可能であればウェブサイトにもうその都度、載せていく。そしてそれを日本中、あるいは英語になっているものに関して言えば英語圏には少なくとも伝わる、そういう形でやっていくっていうことを考えています。大体の感じは、こんな感じでやっていますよっていうことなんです。

さっき少し触れるって言った…、この数年間でですね、資料を寄贈したっていう申し出が年に何件かはあります。今月の半ばぐらいにダンボール40箱って言ったかな？、脊損ってわかりますか？ 脊髄損傷、事故とかそんなんで腰を打つ、もっと上の頸椎を打つと頸椎損傷になりますけど、そういう人たちの全国組織っていうので、脊損連(全国脊髄損傷者連合会)っていう組織がある。その関係の資料をこちらの坂井めぐみさんっていう、彼女自身も脊損の人ですけども、今度博士論文書いて、たぶんその博士論文は書籍になりますが、その彼女が研究、調査をする過程で脊損連の人たちと知り合って。それでその組織の会長など務めた方が持っていた資料を寄贈したっていうことで、段ボール40箱引き受けます。

そうしたいろんな関わり、僕が何十年前に付き合いのあった組織の人が「今度事務所が変わるんで手狭になるし」っていうような場合もあれば、例えばある精神科医が亡くなって、そのままであれば、まあ捨てたんでしょ

うね、だけれども「たぶんこれは貴重なものだ」っていうことで、遺族の方、あるいはその方の関係者が申し出をしてくださって。で、私が亡くなった方の書庫に赴き、話をつけて送ってもらうとか、そういう遺贈の類も含めた資料の提供の申し出っていうのがずいぶんあります。

それはたぶん、私たちがやっている病者障害者の社会運動っていうものが、1960年代、70年代ってあたりに…、それ以前からあったって言えばもちろんあったんだけど、また新たな、あるいは大きな形で展開していく、そうした世代、時代っていうものを担った人たちが、当時20、30って人たちが、70、80になって亡くなられていくっていう、そういう中で、自分たちの今までやってきたことを残したいと。それから、自分たちの仲間が、あるいは先輩がやってきたこと、その記録というものをそのまま埋れさせたくない。そういうことで残すことを希望され、ただそうしたものを受け入れる場所っていうのは意外なほどない、ですね。で、いろんな人をつてを辿って、ここだったら受けてくれるんじゃないか、っていうことで、申し出をいただく、それを受け入れているということです。

今のところ我々の書庫は、偶然のように適した場所、割と広いスペースをグローバル COE が始まった時に、立命館から借り受けることができたんですけども、今のところは間に合っています。ただそれが、3年、5年というような時間が経っていく中でどうなるのか。増えていくこと、拡張していくことは基本的にいいことだと思うわけなんで、これは嬉しい出来事ではあるんですけども、そうしたことも考えなきゃいけない。

とにかくそうしたことについて、やっぱり学問というのは遅れを取っちゃいけないと思うんですよ。やっぱり今、あって、僕らが今活動しなければ、そういう仕事をしなければ、永遠になくなってしまうような資料ですね。文字資料は焼けなきゃあるって話はあるんですけども、生身の人っていうのは死んでいくわけで。話聞かないとその人の記憶っていうものはそのまま消えてしまうこともある。そうしたことも含めて、こうした活動っていうのはずっと続けなきゃいけない、っていうことと同時に、今やっとかないといけない。

その二つのことをやんなきゃいけないと思って、ずっと言ってきたはいるんだけど、なかなかっていう状況なんだけど、しかし、でも、同時に追い風も吹いてるわけです。そういうことに対して絶対必要だって思う人はたくさんいてね。でそういう人たちの期待、支援、協力、そうしたものを得て、我々はこれから、長く、しかし急

いで、この活動っていうものをしていかなきゃいけないと、そういうふう考えております。ちょうど20分経ちました。どうもありがとうございました。

## 配布資料：生存学研究センターによるアーカイヴィング

立岩 真也  
(立命館大学)

### ■関連する文章

- ◆立岩 真也 2016/03/31 「アーカイヴィング」, 立命館大学生存学研究センター編『生存学の企て——障老病異と共に暮らす世界へ』, 生活書院, pp.
- ◆立岩 真也 2017/03/01 「立命館大学生存学研究センターによるアーカイヴィング」, 『法政大学原社会問題研究所環境アーカイブズニューズレター』2:2-3

※以下、[2016/03/31]の全文引用を含む[2017/03/01]。太字は原文にはなし。註は新たに付した。

文科省にグローバルCOEというものがかつてあって(今はもうない)、私たちはそれに「〈生存学〉創成拠点——障老病異と共に暮らす世界へ」というもので応募して、当たって、2007年度からそれが始まった。今は立命館大学の組織としての「生存学研究センター」に活動が引き継がれている。何をしているかはHPでどうぞ。「生存学」で検索して一番目と二番目が関係のサイトです。自慢しておく、二番目に出てくる<http://www.arsvi.com/>の年間ヒット数は1200万超<sup>1)</sup>。加えて、活動を紹介する『生存学の企て』という本を昨年出版した(生存学研究センター編、2016、生活書院)。そこに「アーカイヴィング」というコラムがあって私が担当した(他に「序章」と「補章」を執筆)。以下がそのコラム。

物事を考えること自体は、みんな各自勝手に考えればよい。ただ、その考えるための材料が、今までそんなにたくさん生産されてこなかった。「センター」ではこれまで出版されてきた病気や障害、老いなどについての刊行物を、単純に出版年別に、並べる仕事をしている。

そして一冊ずつのファイル(ページ)を作る、HPにアップし、事項別や人別や組織別のページに関連する文献を並べ、それぞれのページにジャンプできるようにしている。例えば筋ジストロフィーの本を集め、その文献リスト(のページ)を作り、そのページから個々の本のページに行けるようにしている。

本を分類して書架に並べるといったことも考えたが、どんな分類法をとっても、うまくないところは残る。この方法をとれば、ある分野にどんな本があるかわかると同時に、その現物を書架から取り出すことができる。そして単純に発行年順に並べられているのを見ると、ざっと流行り廃りがわかるということがある。いつかあった「科学技術批判」というものはあれはいったいどうなったのだろうという疑問が生ずることがある。それはそれで研究の一つの主題になる。

他に、手間をなかなかかけられないということもあり、集められているものはわずかなのだが、いくつかの雑誌・機関誌を集めてファイリングし、なかには書誌情報をデータベース化したり、その中のさらにわずかについては全文を入力したり、画像ファイルにしたりしている。

医学の研究書は医学部の図書館に行けばいいし、社会福祉学についてもそうだ。しかし、どちらからも外れる本もかなりの量ある。そういったものはできるだけなくならないうちに集めておこうと思っている。学術的に立派な本だけがいるわけではない。記録・証言としてとっておく必要がある。そういうものを捨ててもらっては困る。しかし現状では多くの図書館が捨てている——私たちが古本として(たいがいごく安価に)購入するものなかに図書館の処分品がけっこう混じっている。

国会図書館にはあるとしても、そこまでの手間をかけるのは、とても面倒だ。そして出版社から刊行されたものでないものも多い。わざわざ国会図書館に納品するという人・組織もまたそう多くはない。図書館、資料室にはどこにもないものもけっこうある。捨てられそうなものを、あるいはどこでも集められていないものを、集めておく必要がある。

人文社会系の「センター」がある物理的な空間を有することの大きな、唯一と言ってよいかしれない機能はそこにあると思う。そしてその情報を公開する。

文部省の科学研究費のような外部資金がとれている何年かの間だけというのでは意味がない。やめないこと、続けることに決定的な意義がある。それは、簡単になくならないはずの恒常的な組織、そして「学術」をもって社会に貢献する組織、そしてなにがしかの金をその貢献に投ずることのできる組織としての大学ができる事業だと考える。

そのためには一定の知識が必要な場合がある。例えばピラには「年」はいらない。ピラに「何月何日どこどこで集会」とあったら、年はそれが出たその年のことに決まっているのだから、年などわざわざピラに書き入れたら、むしろまぬけなピラになってしまう。当然書いてないことが多い。だが後になって、それがいつのことかわかった方がよい、のだが書いてないということになる。すると何かと照らしあわせて発行時期を特定する必要がある。それにはその領域を研究する人がふさわしい。またその人のためにもなる。だが、いつもそんな人がいるとは限らず、今のところ未整理のものが箱詰めになっているのだが、資料自体は貴重なものだし、いつかは、と思ってとっておくことになる。

そういう場所が、いくつか、すくなくとも一つは必要だと思う。そんなことを思って、文献・資料を集めていることを知らせてきたこともあって、この数年の間にもずいぶんの人たちから資料をいただいている。その内容、その事情についてはHPに記載している。ここではごく簡単に。尾上浩二（DPI日本会議、障害者運動・政策関連資料）、広田伊蘇夫（精神科医、2011年逝去、精神医療関連の書籍・専門誌）、福永年久（兵庫青い芝の会、障害者運動関連の資料貸与）、椎木章（大阪の学校教諭、大阪の障害者運動関連資料）、吉川勇一（元ベトナムに平和を市民連合事務局長、2015年逝去、ベ平連に関係した人たちの書籍等）、星野征光（精神科医、精神科医たちの社会運動関連資料）、寺本晃久（東京で知的障害者他の支援、「ピープルファースト」他関係資料）、他。さらに現在（2016年1月）、2人の方（の関係者）から申し入れをいただいている<sup>2)</sup>。

そしてその収集の必要の度合いは高まっている。状況は困難になりつつ、しかしそれを今のうちという気持ちも大きくなっていると思う。例えば、戦後、1970年代頃までを体験した人は今、70代、80代といった年になっている。亡くなった方もいる。それとともに無くなっていくものがある。実際、遺族

の方が廃棄しようとしているのだが勿体なくて、と寄贈の申し出をいただくこともある。

以上は文字になっているもののことだ。むろん文字になっていないものもたくさんある。その記録をとっておくのも、より面倒だが、やっておかねばならないことだ。紙は捨てられ焼かれなければならない。しかし人の記憶の中にしかないものは、その人が生きている間に聞くしかない。

だからより急がねばならないことがあるのだが、自分（たち）が行なったことに対する後悔や、それを語らないという矜持があって、空白になってきた部分もある。ただ今の時期はすこし回顧的になっている時期でもある。かつてのひりひりする感じが少しなくなる。黙っていることで筋を通そうという人の中にも、それでは最低伝わってよいものも伝わらないだろうと、すこし考えを変える人もいる。そんな変化も感じる。できるし、できるうちにやっておこうということだ。

と、こういうことです。関連して現在科研費（基盤B）に（何度か落ちている）「病者障害者運動史研究——生の現在までを辿り未来を構想する」応募中。その計画の全文もHPで読んでいただける（「病者障害者運動史研究」で検索）<sup>3)</sup>。

「環境アーカイブズ」のことはたぶん偶然に知って、素晴らしいと思って、（私個人の）ツイッターに呟いたら連絡をいただいて…というようなことであつたと思う。その公開資料一覧の最初から、薬害スモン、水俣病、サリドマイド…とあり、0008は薬害スモンで最高裁まで争った古賀照男の資料である。かろうじて水俣病についてはかなりの書き物があり、熊本学園大学の水俣学研究センターがある。けれども多くが消えて行きそうだ。私はいま雑誌『現代思想』で「生の現代のために」という連載をさせてもらっていて、スモンやサリドマイドのことに言及することがある。私は無知で時間もなく、何も知らないで書いている。知ろうとする人が出てくるようにと願って書いている<sup>4)</sup>。そのために、研究機関は蓄積し整理する。上記のコラムに「唯一と言ってよいかしれない機能は…」と書いた。真面目にそう思っている。法政大学がこのアーカイブズを作ったのはとても立派なことだと思う。さて私たちはどこまでのことができるか。お金の入り具合にも左右されるのだが、ともかくできるだけのことはと思っている。

註

- 1) 現在は年 2000 万ヒット超。→統計 (<http://www.arsvi.com/z/h04.htm>)
- 2) 2018 年には、いずれもかなり大規模な 3 件。→生存学研究センター：寄贈書籍・資料の受け入れ (<http://www.arsvi.com/d/arc.htm>)
- 3) ようやく当たって 2017 年度から開始された。→「病者障害者運動史研究」(<http://www.arsvi.com/d/hsm.htm>)
- 4) 2018 年に 2 冊の本になった。そのうち 1 冊はこの催しに間に合ったが、よりこの催しに関係する 1 冊は間に合わなかった。その後者『病者障害者の戦後——生政治史点描』の第 4 章「七〇年体制へ・予描 1」の第 1 節「短絡しないために」、1「短絡しないために」、2「偉人について、「世の光」について」、3「民間」、4「政治」、第 2 節「医（学）者たち」、1「近藤喜代太郎（一九三三～二〇〇八）：研究における研究前からの施設の肯定」、2「ついで三人をあげる」、3「椿忠雄（一九二一～一九八七）」、4「井形昭弘（一九二八～二〇一六）」、5「白木博次（一九一七～二〇〇四）」、6「府中で」。ある領野で褒めたたえられた人が、別の場では異なる振る舞いをする。そんな、楽しくはないことも、一度は記しておく必要があるのだが、誰もしてくれなかったから、記した。そのように「生政治」は、退屈に、凡庸に作動する。→「『病者障害者の戦後——生政治史点描』 連載・152」(<http://www.arsvi.com/ts/20180152.htm>)

